

---

# わたしのあしあと

月影れん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わたしのあしあと

### 【NZコード】

N3241C

### 【作者名】

月影れん

### 【あらすじ】

この物語は私『月影れん』が主人公の、フィクション、ノンフィクションを組み合わせた物語。いじめ、本当の友情などがあるひとりの少女が（笑）真正面から見つめていきます。

## 第一話・記憶をタドル。（前書き）

フィクション+ノンフィクション物語です。

## 第一話・記憶をタドル。

私の名前は月影れん。

つきかげ  
れん。

現在、高校1年生。咲流星高校に通っています。

この高校はこの辺で一番レベルの低い公立高校。

自己採点の結果が良くて、第一志望の緑谷高校でも、受かつたつてた力モ……。

とか、ちょっと後悔しつつ、通っています。

まあ、安全だからって高校のレベルを下げて受験したんだけどね（

^ー^；）

緑谷高校には仲のよかつた友達がいっぱい行っちゃったんだよなー。でも、今は咲流星高校にも仲のいい友達が出来てわりとたのしくやつてます。

今高校ではみんな大人になつて、いじめなんてないんだけど、ニュースとかでいじめの問題を取り上げられることがよくある。

自殺をする人もたくさんいる…。

そんなガキみたいなことしなくていいじゃん。

「つ……つきかげれんです……。よろしく

なんとなく記憶を辿つてみた。

浮んだのは小学一年生だった私が入学式の初日に皆の前で自己紹介をしている場面だった。

私はほかの子よりもひどく緊張している。しかも声も小さい……。

我ながら、過去の自分のあざけなぞ、純粋さに笑つてしまつた。

このころ、色々あつたなあと、色々思いを馳せてみる。

誰かを傷つけたり、誰かが他の誰かを傷つけていたり、傷つけられたり……。

誰かの優しさを知った気がする。

誰かの涙もみた気がする。

誰かの苦しみも知ったきがする。

人の裏側も知った気がする。

懐かしい。あの時の記憶。あの時のこと今までの思い出全部。

蘇れあの日々よ……。

蘇れ。

そう

この物語は、フィクションとノンフィクションを組み合わせたわたしの周りで起きた出来事。

この小説には少しノンフィクションも含まれています。作中でてくる私の友人のモデルになってくれる人には承諾はとつてあります。

## 第一話・記憶をタドル。（後書き）

こんにちは、月影れんです。

えー、私は今まで、コナンのファンフィクションしか書かなかつたのですが、この小説を書き始めることにしました。

最近酷いいじめなどが多いじゃないですか。それで、それを題材にした小説を書こうと思ったんです。それで、あえて私を主人にして、少しノンフィクションも入れてみたんです。  
まだまだ未熟者ですが、よろしくお願ひします。

## 第一話・記憶へモードル。(前書き)

まほやSFですね……汗

## 第一話・記憶へモードル。

「オギヤー、オギヤー……！」

私は、12月14日の晩の12時頃、鳥取県のある市で生まれた。  
2・520 セカイといつ少し小さい赤ん坊だった。

私はタイムスリップをする。もちろん、頭の中で。

私はそつと目を閉じた。……私の足跡を私の足で辿るために……。

こぞりつ！ タイムスリップ！ ……！

ゴオオオオオオオオオオオオ

……えつ！ ? なに！ ? 「コレつ！ ?

私はなぜか眩しい光に包まれた。何かに吸い込まれていくような錯覚を覚えた。

ものすごく強い引力に吸い込まれていく。

「うわあああああああつ！ ……！」

錯覚などではなかつた。私は、まるでブラックホールのようなんへんてこな物体にまつさかさまに吸い込まれていつた。

「う……。痛あ。あれ？」、「こには……？」

私の目に映つたのは、一言で言つて、不思議な光景セカイだった。  
なにかがおかしい……。

ん！ ? んんんんんんん！ ?

えええええ！ ? (おちつけ) 私、雲の上に乗つてるう……！ ?

? ? しかもピンク……（<ーー>：）

雲つて水蒸氣（？）だよね？ これ、まるでわたあめみたいなん

だけど！？

頭を強く打ちすぎたのか！？ 死んでしまってここは天国なのか！？

私はいろいろ思考をめぐらせてました……（笑）

「おう、やつとおきたか……」

なんか今、生意氣な男の子の声が……。氣のせいかな？まあ、一応。

「え……？だれ？何処？」

「バー口。ここだ！！！俺が見えねえのか！？」

見えないって……（――――）何処だよおつ。

私は辺りを見回した。やつぱり誰もいない……。

「見えないんだけど……？」

「はあ！？おまえの下にいるだろ……お・ま・え・の・し・た・に！――！」

私は、思いもよらない答えに一瞬ボカソとなつた。

はあ！？私の下あつ！？

私は、恐る恐るアヒル座りになつた自分の足元を見てみた。

「！？」

そこには、妖精か天使か悪魔ともつかないへんてこな生物がいた。手のひらサイズくらい……？

「そんなに驚くなよな。」

そのへんてこな生物は喋つた。

「！？」

もうなにがなんだか分かんないよおつ……。

「お～い？もしも～し……（呆）」「

「ハハ……。君は……？」

「俺の名前はモルフ。俺は、おまえの……」

「ゴクリ

「妖天魔。ようてんま守り神つてわけ。あ、妖精の妖、天使の天、悪魔の魔つて書くんだ」

「なにそれ……」

「意味わかんない……。妖天魔つて！？やつぱり私死んじやつたの！」

私の（混乱）状態を無視して、その、妖天魔……は話を続ける。  
「まあ……いきなり言われてもわからんねえよな。妖天魔つつーのは、人間誰にでもついている守り神。普段は目には見えない

「え……？じゃあ、なんでウチには見えるの？」

「お前の心が俺を呼んでいたからだ。だから、俺はおまえをタイムスリップさせるために姿を現したんだ」

「タ、タ、タ……タイムスリップうつ！……？？」

これは現実なのだろうか？本当に可能な？タイムスリップ……

「おっと、勘違いすんなよ。通常のタイムスリップとはわけが違うぜ？おまえの記憶へタイムスリップすんだよ。

そうだな、あんたがある一場面を忘れてしまったとする、そうしたら、そこへは行けない。ノイズがはいるか、画面が乱れる。まあ、鮮明な記憶でなくともなんとなく記憶があつたらセーフだけど……」

私は、その……よ 妖天魔の話を啞然としながら聞いていた。

「まあ、なんとなくわかった……かな？」

「もちろん、無理やり……。

「そうか、だつたら、幼稚園のこころに戻るか？俺もついていくから。

「

「え……？ 今から？」

「あ、 そのまえに、 呪文かけてくんねえか？『らむ&クラムエルボンバー』って」

は？

「ら、 らむあんどくらむえるぼんばー……！」

パアアアアアア

「サンキュー」

「体、 大きくなつた！！！」

「ああ」

大きくなつたとは言つても、 30センチくらいなんだけれどね。 ぬ  
いぐるみサイズ

「じゃあ、 行くぜ」

こいつはそう言い、 あの「ラックホール」のよつな物体を出した。 ブ  
ラックホールというより、 夜空と言つた方がいいだろうか？ 星がキ  
ラキラと瞬いでいるのが見える。 宇宙をホール状にしたみたいだつ  
た。

「えー？ ちよ……」

うわああああああああつ…………！

私は、 その夜空に吸い込まれていった。

乱暴だ……。 こいつ乱暴だ……（ -\_- 怒）

私は思いつきり尻もちをついた。 空から落とされたんだ。

「もおー。骨が折れたらどーすんの……！」

と叫んだが、痛くない。全然痛くなかった。

「こちいち、うるせーなあつ！！！痛くねえーだろ？」

私はこいつ……いや、モルフの言葉にムカッときたが、あえて何も言わなかつた。

「こー、どー？モ、モルフ……」

私が、そう聞くと、モルフは田をキラキラ輝かせた。

「初めて俺の名前呼んでくれたな れん、よろしく」

「う、うん。……でか、こーどー？なんか見たことあるような景色だけど……」

なんだか、懐かしい。そんな感じがした。

「こーは、れんの幼稚園のすぐそばだよ。……13年前の

「え？マジー？」

「マジ

そういうえば、こー歩いてみんなと遠足に行つたつけ……。  
怖いほどよく覚えてる。みんな今どひつてる？まだ、色褪せてない？

「もうすぐで、れんとれんの母さんが」到着だぜ？」

「えええええええー！？」

＝過去の自分に会つてことだ。まだそんな心の準備は……。

「ホラ、れんちゃん。もうすぐ入園式だよ

母の声が聞こえた。私は、気付かれるわけないのにサッと陰に隠れる。

あのころのわたしは、慣れない環境に怖気づき、ぐずつっていた。

「いやだ……。いきたくないっ！」

「なに、言つてるの！？行くよ。」

わたしは、母に連れられて、遊戯室へ向かっていった。

「うわ、れん、ちっせ～」

「……」

「ん、どうした……？」

「別に。」

私は複雑な心境だつた。過去を見詰めたいこという気持ちが、過去を変えたいという気持ちに変わつてしまつていて、このことに気づいたんだ。

タイムスリップって、自分が若返るんじゃないの？ただ、昔の自分を眺めるだけ？

それになんのメリットがある？

「あ、そうだ。レポート書けよ」

「レポート！？」

「ああ。過去の自分を記録しろ。分つたな」

「え？ どんなふうに書けば……」

「れん風でいい。ハイ、その質問終了。ほい、これに書け。」「困つた。私風つて……？まあ、いい、とりあえず書こう……！」

私はエルフにもらつたノートをみた。そのノートの表紙には、「れんの記憶」つて書いてあった。

私はおもむろに、一ページ目を開く。すると、『ポン』と不思議な形のシャーペンが出てきた。

決心がついた。

書こう。私のありのまま……私の足跡を……。

<記録開始！！！！！> by れん

「はい みなさん、並んでね。もうすぐ始まるよ」  
後ろの方から、保育士の先生の声がした。後ろを振り向くと、わ  
たしと同じ年くらいの子たちが、列になつて並んでいた。わたしは、  
少し不安だったが、そこへ行つた。

私は、当時のわたしの視点でレポートを書くことに決めた。私が  
ら見たわたくしって、思つてるより難しそうだから……。他人を書く  
よりも難しそうだから……。

どこかで聞いたことのある様なアニメソングが流れ、式が始まった。並びは、背の順で、一番背の低いわたしが一番前だつた。

「背え、低～いつー可愛い～！～！」

入場している途中、保護者や先生のトコロから声が聞こえてきた。小さかつた私にもなんとなく、その言葉がわたしに向かっているものだということはわかった。

（そのあとは、保育士の先生が話をしたが、もう一、二年も前になるので内容は覚えていない（^\_\_^;））

そこで、シャーペンの動きを止めた。モルフの言つたとおり、ノイズが入つてゐる。忘れたんだ……。

記憶はいつか、忘れてしまつものなのだろうか？

私はそう思いながら、また、シャーペンをほしらせた。

私は正直不安だった。一口約半分は母と離れて過ごす事になるからだ。だからといって幼稚園に行かないわけにはいかない。いろんなコと遊べるという期待も少しあつて、ちょっと複雑な心境だつた。

~~~~~

「おつかれ～。今日は終了～」

モルフがへんてこな羽根を使って飛んできて私に囁つた。

「ふう……」

私は、疲労のため息を漏らした。書くのって結構疲れる……。

「おいおい、もう疲れたのか？先が思いやられるぜ」

「いつまでやればいいの？」

私は一番気になっていたことを聞いた。

「おまえの記憶ぜ～んぶ」

「ええええ～っ！～？？」

「つむせーな……冗談だよ。印象に残っているあしあとを全部つけて」と……。

モルフはそう言つ終わらない内に、さつきのみみたいなブラックホール（？）を作り始めた。

「帰るぞ。」

「……え？ もう…？」

まだ、13年前にいたい。わたしを見たい。

「俺、昨日寝てないんだ。俺を殺す氣か？」

……ハハハ。

「また、これる？」

「言つたら？印象に残つてゐるあしあと全部つて。だから、また行くぜ？」

「……そつか。」

「あ、それと、さつきは乱暴で」めんな。今度はこれにてタイ

ムスリップしような

モルフは、小さいカプセルをわり、なにかをだした。

「それは？」

「時空船さ。ふだんはこのカプセルに入れてるんだ」

取り出した小さな乗り物の模型がみるみる大きくなつていく。数秒後には、立派な乗り物の大きさになつた。

「すごい！――！」

「だろ？」

モルフは自慢げな顔で私を見た。

「……てか、なんで今までコレを使わなかつたの？（――）いきなり空から落とされて、痛かつたよ～」

「わりい。修理に出してたんだ」

「だったら、なおつてからタイムスリップすればいいでしょ～！――！」

「つるせーな！――！」

なんだかんだ言いながら、私たちはその時空船に乗り込んだ。

ペペペペ

『認識しました。月影れんさんですね』

『一体の……いや、1匹の、といつたほうがこじょうな可愛いじこロボットが出てきた。

「ねえ、モルフ、この口は？」  
「ああ、こいつは、らん。俺の相棒。この船で俺らの世話してくれるやつ」

「へー……。可愛いね。性別は？」

『一人称は『私』ですが、私の性別は女ということになつています』  
モルフのかわりにらんが答えた。照れたらしい、頬っぺたのライトをピンク色に点滅させた。声は結構、可愛い。

ただ、『ということになつて』といふのには、少しひつかかっ

た。

「女」だとコンピュータで設定されているだけなのだらう。

『れんさんの現代に<sup>セカイ</sup>帰りますね?』

時空船に備え付けているボタンを力チャ力チャいじりながら、らんが聞いてきた。私は、少し困り、モルフを見た。

「ああ」

モルフは私を見て、ため息をつきかわりに答えてくれた。  
『了解。ゆつくり帰りますか? 高速で帰りますか?』

モルフは、少し考える仕草をしたあと、  
「ゆつくりで頼む。れんに教えないきやいけないこともあるし」と言った。

『了解』

早く帰りたいんだけど……。

ウイイイイイイ

「お、動き出した」

私の思いはつゆ知らず、窓の外の宇宙(?)を眺める呑氣なモルフ……。

「私、早く帰りたいの」

私は半ば怒りながらモルフに言つ。

「大丈夫だつて。同じ時間、同じ場所に戻れるから

「え…。そーなんだー」

「ああ」

「ねえ、さつき言つてた、ウチに教えたいたつて?」

「ああ」

そう言い、モルフは私の持っていたノートをさつと私から取り、

「フムフム」とそれを読み始めた。

私は何も言わずに、そのようすをじっと見ていた。

モルフは、それを読み終えたらしく、パタリと閉じた。

「ふうん。自分の視点からね～。結構、いいじゃん」

モルフは、小生意気な笑みをこぼし、感想を述べた。

私は、そんなモルフを見て、気になっていた質問をしてみた。

「ねえ、このノートの記入欄、全部手書きみたい。もしかして、モルフ……これを書いてたから昨日寝なかつたの？」

私がそういつた途端、モルフは顔色を変えた。

「べ、別に……大した事じやねえよ／＼／＼／＼」

モルフは顔を赤く染めた。おもしろい奴……。

てか、シンデレ……シンデレラ男バージョン？（笑）

「そ、なんだあ。『くろうせん』

私はそれだけで勘弁してやつた。私は話題をかえることにした。

「ねえ、モルフ。昔の自分をただ見ているだけなの？」

私がそう聞いたのは、このままじゃ、なんのメリットもない。そう感じたから。

頭の中でタイムスリップしてたときは、自分が若返つていたから。違和感を感じたのかもしれない。

「…………んだよ、いきなり…………」

「ただ見物ているなんていや。私は過去と戦いたい！――！」

いつの間にか、過去を振り返つて、現実を掴むという夢は、過去と戦い、未来を生きるという夢に変わっていた。

「…………できるよ。」

「本当――?――?」

「ああ。でも今日は止めといた。幼稚園児になるなんて、結構抵抗

あるだろー。」

「…………うひ。 大丈夫。」

過去と戦いたいから。 そんなのなんでもない。

「そひか。 じゃあ、 今度から俺がレポート書いてやる」

「本当に…？ ありがと。」

レポート書いてくれることに感謝したんじやない。 過去と真剣に向き合わせてくれたことに心から感謝したんだ。

「ねえ、 らん」

私は、 らんを呼んだ。

『はい、 なんでしょう』

「高速お願いします」

『了解』

@@@@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@

『れんさん。 おつかれさまでした。 つきましたよ』  
5分もしないうちに私の現在の自分の家についたようだ。  
セカイ

……つて、 ん？

「あれ？ ここどこ？ まだ宇宙じやん」

『ここから地球に帰れ。 …… みたいな？

『その扉から出れば、 れんさんの部屋の押入れに行きまわ  
らんの意つとおり、 そこには扉があった。

押入れつて…… ドラ モンみたいじやん。 。あ、 ドラ モンは、 引  
き出しが……。

あ、思い出した。押入れはドラ もんの寝室ですねーー（もつやめ

ろ）

「いくぞ」

モルフはそう言い、2つのカプセルをとりだし、時空船、らんをそのカプセルにそれぞれ入れた。

「モルフも！？」

私は驚き、モルフを見た。

そしたら、モルフは、ジト目で私を見て、

「あつたりめーだろ？ オメーの妖天魔なんだから」と呆れたように愚痴つた。

そう……。

「あー、おもしろかつたー！……！」

私は、押入れから出て、そう叫んだ。

だつて、なかなか興奮タイムリップがおさまらないんだもんっ！—

「おい、楽しむための時間旅じゃないだろ？ 過去を見詰めるためなんだろ？」

「そうだよね……」

私は目を瞑り、静かに呟いた。

そうだ、私は決めたんだった。

過去と戦う事を。そして未来を掴む事を……。

「ありがと。モルフ、らん」

私は大切な事を彼らに教わった。ありがとう。

「これからも頑張ろうぜ？」

モルフは不器用な笑顔で私に言つ。笑つことにまだ慣れていないんだろう……いや、自分の気持ちを表すことに不器用なんだ。

私はそんなモルフが可笑しくて、思わず笑ってしまった。

「なにが、おかしいんだよ！？」

モルフは不貞腐れた顔で言い返してきた。……多分、照れ隠し。

「こつらへ、結構生意氣だなあ。」これからトロトロソジツヒヤウツハヘー！（おこおこ…）

「別にいへ」

私は、わざと机の上にモルフを見た。

「……つたぐ。じゃあ、今日から俺の家はおまえの部屋な。  
「はあっ！？」

私の部屋あつ！？

「困るんだけど。机の上もぐつちやぐちやだし」

私は、いろいろな文具で散らかした机の上をチラツと見た。  
「うつわあ～。おまえ、漫画家か！？（笑）コピック転がってるわ、  
漫画の原稿用紙が裸のまま教科書の下敷きになつているわ、トーン  
も放つぽつてあるわ……。最低だな……（・・・・）」

モルフはそういう、机の上にあつたコピックを蹴った。

「関係ないでしょ！？もあっ！コピックでサッカーハシナイでよ」

「へいへい。あ……もう時間だ！！！」

モルフがそう言つ終わると、モルフの体は出合つたときほど  
のサインになつた。

少し驚いたけど、私はモルフをつまんで、机から下ろした。

「つたく、どこに住むの？そんな体で……」

そう聞いたのは、潰してしまつ恐れがあるから……（<――>・）

「なんだよ。そうジト田になるなつて！」

「自分がジト田になつてるなんてわかんないも～ん

「ははは（怒）。じゃあ、いすの中に住む。」

モルフはいきなりそつと机にじやがつた……。

「はあ？いす？」

私は発言の意味が分らず戸惑つた。

「ああ。なんか座るところが開くいすあるだろ？そこでいい

「……。わかつた……。その中、掃除する。でも、なんで知つてるの？」

「一回、下見に来てたんだ」

「あつそ……。」

私はダラダラと掃除を始めた。

「『じくろ～わん』」

手伝え！！！私はそう思いつつ作業を続ける。イラスト漫画を描いた紙や、何年も前の学年誌の付録のシール……わんさか出てくる。

「…………ん？」

手が止まつた。何かを掴んだからだ。全身に寒気が走る。

な～んか、嫌な予感がする……。

私は恐る恐る……手を開いた。  
ブルブルと蠢ハバキぐ怪しげな物体。

……う、 虫か虫むし…… ( 、 、 川 )

うじむし? C N i m u s h i ? ウジムシ!?

蛆虫ハバキい い い い い い つ ! ? ! ?

「いやああああああああつ…………?????」

「なんだ?どうした?」

モルフが驚いた表情で飛んできた。

「う、うじい い い い い つ ! ! ! ! !

私は動転し、モルフに向かつて蛆虫ちゃん(笑)を投げてしまつた。

「ん?なんだ、こいつ可愛いじゃん?よしよし。怖いねえちゃんに投げられて怖かつたよなあ~。よしよし」

うつわ…………こいつ頭おかしいー？

そう思いながらも蛆虫はモルフに任せてくれて、下において手を洗い、また2階の自分の部屋へいき掃除を続けた。

「はあ……掃除って結構疲れるなー…………」

「主婦になつたらちやんとするんだが。わざわなよー」

そう言つモルフは蛆虫とまだじやれてくる。見たら氣分が悪くなつそうだ。

「へいへい。…………ん？」

私は手を止めた。いすの中の奥のほうに小豆の様なものがある。

「…………なんだろうこれ？小豆なんて食べた覚えないけど…………」

私は首をかしげ、それを掘もつとした。

ガサ

「…………」（サア——） 血の氣がひく音  
動いた。小豆が動いた…………。（ ）

ブルブル（（（、・、・）））

小豆に、足が……生えた。生えてしまつた————つ————！

小豆は不気味な動きをしている。

私は悟つた。そいつの正体を……。

「キブリやんけ！……！」

私はとつさの出来事に悲鳴をあげることすら忘れていた。ただただ、冷や汗が流れるばかりだ。

こいつは気持ち悪い。世界で一番気持ち悪い。……いや、恐怖を感じている？

人はなぜこんなにも小さくて潰せば殺せる弱い虫に恐怖するのだろう

う？放つておけば別に問題ないはずだ。「ヨキブリはいきなり人間に襲い掛かってきて生命の危機へ追い込むような凶悪な虫ではない。……ねいつたい何故？……って、のんきにヨキについて語ってる場合じゃない！！！」

私はモルフだつたらなんとかしてくれるかな？

と思い、未だに蛆虫のやう（おこ）とじやれているモルフに声をかけた。

「ねえ、モルフ。この『ヨキブリ殺して……めっちゃやめこのつ……』」

私がやつぱりやめたが、モルフはすくこスピードで飛んできた。  
「まだ殺してね～だらうな？」

「うん……」

「ヨキブリやん、こっしょに遊ぼうな」

「は……？」

モルフの言葉に絶句してしまった。

ありえない。人間が恐れてる生き物と遊ぶなんて……。ありえへん！…………

こんなおかしなやつとこれから一緒に生活していくなんてぜつたいに嫌ああああつ……！……

「れん、こっしょに遊ぼうぜ？」

「やついやあああつ……！」

## 第一話・記憶へモードル。（後書き）

どーも、月影です。

うわ……タイムスリップしてしまいました……汗。

しかも、妖天魔って……。

この中にもノンフィクションも含まれてますんで（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3241c/>

---

わたしのあしあと

2010年10月9日19時20分発行